＜大嘗祭（だいじょうさい）－初心者用－＞

大嘗祭は、即位に際し、天皇が初めて新穀を聞し食（きこしめ）され、皇祖及び天神地祇に供し奉る儀式で、一世一代の特別な新嘗祭（にいなめさい）である。その詳しい内容を、主に『神社のいろは　要語集　祭祀編』（扶桑社）から紹介し、独自の考察を加える。なお、このテキストは『神道要語集　祭祀編』（扶桑社、宗教編と祭祀編がある）が基本となっており、神職ならば当然知っておくべき祭祀知識がまとめられたものである。

1：序

延喜式では祭祀を大祀、中祀、小祀に分けているが、大祀は大嘗祭のみで、最も重要な儀式と言える。

大嘗祭では悠紀（ゆき）国と主基（すき）国が卜定（ぼくじょう：亀卜(きぼく)により占って決定すること）に依り決定される。両斎国の文献での初見は、天武天皇 2 年条の播磨・丹波だが、同じく 5 年 9 月条では、新嘗のためのものではあるが斎忌（ゆき）は尾張国、次（すき）は丹波国に卜定され、聖武天皇の御代には丹波国が悠紀になっている例もある。光仁天皇の御代から大方、都を中心として東西となり、悠紀は三河国、主基は因幡国、その後、宇多天皇の御代から悠紀は近江国に固定され、醍醐天皇の御代からは主基は丹波国ないし備中国からとなり、後鳥羽天皇以後は丹波国と備中国を交互に充て、幕末に至る。その起源は日本書紀に記載のある「天狭田（あまのさなだ)、長田（ながた)」や「狭名田（さなだ)、渟浪田（ぬなた)」にあると思われる。

以下、大嘗祭の大きな流れである。

①両斎国の卜定（4 月）
②抜穂行事（9 月）
③北野斎場行事（白酒（しろき）・黒酒（くろき）の謹醸、御贄の調備、神服調整、10～11 月）
④御禊（ごけい、10 月下旬に賀茂河原行幸）
⑤造殿行事（祭日前 10 日）
⑥供神物の供納（卯日当朝、斎場・大嘗宮）
⑦大嘗宮悠紀殿主基殿の儀（卯日夜～翌暁）
⑧節会（辰巳午日）

(1)斎田の意味

“狭い田”や“長い田”は現在の棚田でも見られるように、基本的に低地に於ける田ではなく、山間部に於けるものである。それは、この国に於ける稲作当初、大規模な灌漑設備が整っていなかったためで、統一王国ができてからは、多くの民を安定して養う必要性が生じたために、低地に於ける灌漑農法が考案され、発達したのである。その灌漑設備として大きな役割を果たしたのが大規

模な古墳群である。これらは各地方の大王や有力者の力を示すものでもあるが、その主たる目的は、古墳の周囲に濠をめぐらし、灌漑用水をもたらすことにあった。
　その統一王国とは、現在は元伊勢とされている丹後の海部（アマベ）氏が大王家として治めた邪馬台国（やまとのくに）に他ならない。故に、いずれの斎国も海部氏縁の地なのである。
　卑弥呼が女王として統治した初期の邪馬台国は都祁野（つげの）～泊瀬（はつせ）付近にあったと推測され、そこは山間部なので、山間部に於ける“狭い田”や“長い田”である。そこを「天＝高天原」と見なすなら、卑弥呼はまさしく天照大神のモデルである。
　播磨、丹波、尾張、三河、因幡、近江、備中いずれも海部氏の丹後に関係が深い地域であり、それは丹後から稲作が広まったためである。

　以下、前述の大嘗祭の流れに従って紹介・考察する。

2：抜穂使と造酒童女
　抜穂使は８月上旬に発遣される。その使は宮主（みやじ：神祇官（じんぎかん）に置かれた宮中祭祀を司る職員）１人、卜部（うらべ）３人の４人が充てられ、悠紀・主基両国で各２人であり、悠紀に宮主１人と卜部１人、主基に卜部２人が充てられた。卜部の１人を稲実卜部（いなのみのうらべ）、もう１人を禰宜卜部（ねぎのうらべ）と言った。

　使はその国に向かうと国司を伴って斎郡に参向し、まず大祓を行い、斎田と斎場を卜定する。その斎田は六段で、大田（おおた）とも言う。斎場の稲実殿地（いなのみのとののところ）は田の西に設けられ、祭りの場であるとともに、神聖な作業の場でもある。斎田・斎場の各四隅には、木綿（ゆう）を付けた榊を挿し立てて聖地の標示とし、殿舎の建築に取り掛かる。
　殿舎には使政所屋（つかいのまつりごとどころのや）、使宿屋（つかいのとのいのや）、五間屋、造酒童女（さかつこ）宿屋、八神殿（はっしんでん）、高萱御倉（たかかやのみくら）、稲実殿、物部女等宿屋（もののべのおみならのとのいのや）の８棟が建てられる。それと共に、奉耕者の卜定が行われる。稲実公（いなのみのきみ）、造酒童女、大酒波（おおさかなみ）などの15人である。このうち、稲実公は御稲（みしね）のことを司る長であり、大田主とも言われ、地方の篤農家である。

　造酒童女は当地の大少領の未婚女性だが、大嘗祭当夜の供御（くご）の御飯（おんいい）の奉炊に至るまでの一切の奉仕を行う。神宮の物忌（ものいみ）童女と同様、この童女が手を付け始めることが原則とされている。抜穂の場合には最初に穂を抜き、斎場の造営に際しては、まず忌鎌（いみかま）にて草を払い、忌鍬（いみくわ）にて掘り始める。御料材の伐採に於いても、忌斧（いみおの）にて切り始め、稲つきでも最初に手を付ける。

この造酒童女 1 人、稲実公 1 人（男）、大酒波 1 人（女）、大多米（おおためつ）酒波 1 人（女）、粉走（こはしり）2 人（女）、相作（あいつくり）4 人（女）、焼灰（はいやき）1 人（男）、採薪（かまぎこり）4 人（男）らを物部人（もののべのひと）とか物部女（もののべのおみな）と言い、斎場に宿泊する。これ以外に 300 人が採用され、斎田の奉耕や京への運搬に従事する。更に、歌人（うたびと）20 人、歌女（うため）20 人が採用され、卯日の当日、国司に率いられ、大嘗宮の前で国風歌（くにぶりのうた）を奏する人たちである。

(1)物部氏

物部氏は軍事だけではなく、本来は重要な神事に携わる祭司一族であることが伺える。

(2)物忌

神宮の物忌童女が奉仕するのは、現在では遷宮諸事の中でもとりわけ重要なものだけだが、かつては童男と共に子良（こら）と呼ばれ、第二次性徴を迎える前の子供たちが御正殿並びにその直下の心御柱周囲の清掃や、神事に於ける玉串奉奠などに御奉仕していた。（彼らの父が神官。）

その原型は、この国が大邪馬台国として統一された時、卑弥呼の 13 歳の宗女トヨが女王の座に就き、父の神官が補佐したことにある。それはすなわち、海部氏の巫女と神官の関係である。

また、造酒＝酒造りの元も海部氏の丹後にあり、神宮の御酒殿（みさかどの）は丹後からの勧請である。

3：抜穂行事

9 月に入ると、吉日を選定して抜穂の儀が斎行される。儀に先立って水際で大祓が行われ、その後、御田に入って稲穂を抜き取る。まず造酒童女、次に稲実公、酒波、物部の男女の順である。最初に抜いた 4 束を御供の料として高萱御倉に納め、それ以外は白酒・黒酒の料として稲実殿に納める。高萱御倉は内宮の御稲御倉（みしねのみくら）のような構造である。

抜穂が終わると、八神殿にて祭典が行われる。この八神は御歳神（ミトシノカミ）、高御魂神（タカミムスビノカミ）、庭高日神（ニワタカツヒノカミ）、御食神（ミケツカミ）、大宮売神（オオミヤノメノカミ）、事代主神、阿須波神（アスハノカミ）、波比岐神（ハヒキノカミ）である。

稲は斎場で乾燥された後、御稲韓櫃（みしねのからひつ）と竹籠に納められ、擔夫（もちよおろ）300 人が担いで京に運ぶ。韓櫃と籠にはいずれも木綿が付けられており、行列は御米を中心として、禰宜ト部と木綿蔓（ゆうかずら）を着けた稲実公などが前を進み、造酒童女は輿に乗って供奉し、稲実ト部が後ろを進む。そして、9 月下旬に京に入り、大麻（おおぬさ）と塩湯（えんとう）で修祓を受け、斎場の竣工まで一時、外院の仮屋に納められる。

(1)八神殿の神々
・御歳神
　豊作の守護神。スサノオと神大市比売（カムオオイチヒメ、大山祇神の娘）の間に生まれたとされる。

・高御魂神
　造化三神の一柱。

・庭高日神
　庭を照らす日の意。屋敷の神。

・御食神
　食物を司る。古事記ではオオゲツヒメに相当するが、日本書紀では大年神＝御歳神の系譜に於いて、ハヤマトの妻として八神を生んだ、との記述がある。話としては混乱しているが、御食神の根源は海部氏の豊受大神である。

・大宮売神
　織物と酒造を司る。太玉命（フトダマノミコト）の娘とされるが、食物・穀物を司る女神である若宮売神（ワカミヤノメノカミ＝豊受大神）と共に丹後の大宮売神社で祀られており、丹後は機織りや酒造りの起源とも言える場所。

・事代主神
　宣託の神。国譲りの事代主としては、ここに登場する意味が不明。一説にあるような、元々は葛城の田の神で、一言主の神格の一部を引き継ぎ、託宣の神の格も持つようになった神（Wikipedia）と見なせば、田の神ということで、御食神と同義。

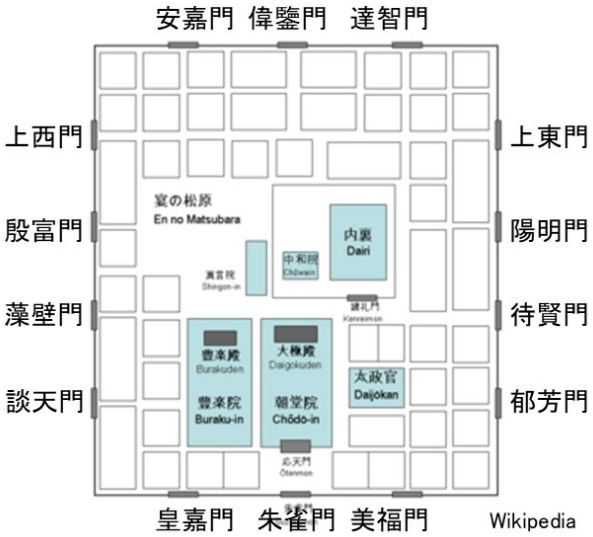
・阿須波神
　屋敷の守護神。御歳神とアメチカルミズヒメとの間に生まれた神々の一柱。古事記にしか登場しない、ほぼ正体不明の神。

・波比伎神
　足元を守る神であり、旅の神。御歳神の子。

4：北野斎場
　北野斎場は宮城（きゅうじょう：皇居）の真北の位置である。平安京大内裏（だいだいり）の北面する外郭の真ん中にあった偉鑒門（いかんもん）から 80 丈（約 242 メートル）の地で、内院と外院に区切られた斎場である。外院は斎田の稲が京に到着するまでに建てられ、内院はその到着後、両国の国司によって造営される。
　まず地鎮祭が行われ、卜食（うらはみ：亀の甲を焼いて生じる筋目で占う）

された野や山に入り、野の神を祭って萱を刈り取り、山の神を祭って料材を伐採する。それらを内院に搬送し、更に大祓を行ってから着工する。神宮式年遷宮に於ける山口祭や御杣始（みそまはじめ）祭と同様である。

平安京大内裏の外郭門



Wikipedia

内院には八間神座殿（やまのかみのくらのとの）、高萱片葺御倉（たかかやのかたぶきのみくら）、稲実殿、倉代殿（くらしろのとの）、御贄殿（みにえとの）、鋪設殿（もうけのとの）、黒酒殿、白酒殿、麹室屋（かむたちのむろや）、大炊屋（おおいいのや）、臼殿（うすのとの）が設けられるが、ここでは御飯（おんいい）を除く白酒・黒酒をはじめ阿波・淡路・紀伊の 3 国からの海産物（御贄）の調理と収納が行われる。

内院の南には神服院（かむはとりのいん）が建てられる。神服（かんみそ）調整の院であり、そのための神服女（かむはとりのおみな）の宿屋も建てられる。ここでは、繪服（にぎたえのみそ）が奉職される。繪服は「和妙（にぎたえ）」の神服で、三河の赤引糸で織られる。これは、三河国に発遣された神服使が捧持し、卜定された織部の長 2 人と織女（おりめ）6 人、工人（てひと）2 人の計 10 人を率いて京の斎場に至り、悠紀・主基それぞれに 5 人を充てて奉職させる。

一方、麁服（あらたえのみそ、荒妙）は阿波国の三木一族が麻を栽培して織り上げ、神服使が京に捧持して神祇官に納められる。繪服は卯日の夜、他の供神物と共に斎場を出発し、神祇官から出発した麁服と途中で合流し、大嘗宮の神座に奉安される。

大嘗祭に於いて和妙・荒妙が奉られることは、神宮に於ける神御服祭（かんみそさい）と同様、天照大神が高天原に於いて自ら神服を織って神祭りされた伝承に基づくものである。

(1)繪服と麁服

何かと特定の一族が織り上げる麁服（麻）ばかり注目されるが、繪服（赤引糸とは“清浄な絹糸”の意）と対となってはじめて意味を成す。それは、現在でも神宮の神御服祭で見られるように、神のお召しになる御服であって、陛下がお召しになることはできないのである。

5：御禊

10 月下旬、二条三条の河原に行幸して行われ、「河原の大祓」とも言われる。『江家次第（ごうけしだい）』に依ると、御手水、御麻一吻一撫、御贖物（おんあがないもの）折敷高坏 2 本供進（一本解縄散米一本人形）、宮主祓詞奏上、五穀を散ずる大炊寮となっている。要は、御贖物の縄を解いて米を散じ、人形（ひとがた）にて身を左→右→中と祓われる儀式である。

東山天皇の大嘗祭再興（1687 年）以降は、清涼殿の東庭もしくは昼御座（ひのおまし）で行われ、明治の大嘗祭（1871 年）でも宮殿内で行われている。大正と昭和も京都御所内の小御所（こごしょ）で行われたが、上皇陛下は皇居宮殿「竹の間」で行われた。

6：造殿行事

大嘗宮を建てる場所は、平安初期の平城（へいぜい）天皇の御代から大内裏の南中央に位置した朝堂院（ちょうどういん、八省院）の前庭にあった竜尾壇（りゅうびだん）の下であった。それ以前は、乾政官院（けんせいかんいん）や太政官院などである。朝堂院焼失後は、およそ旧地の竜尾壇の下に建てられた。明治の大嘗祭では皇居内の吹上御苑で行われ、大正・昭和の時は京都の大宮御所内の旧仙洞（せんとう）御所御所の御苑が充てられ、平成の大嘗祭は皇居内東御苑で行われた。

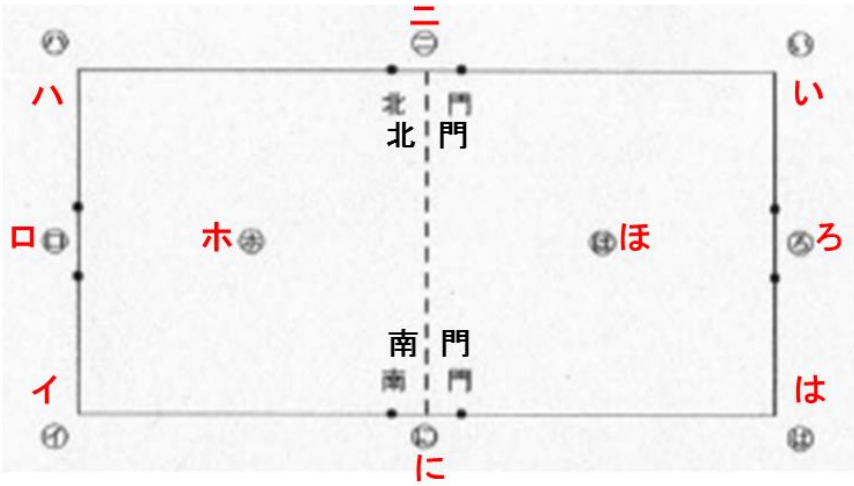
造殿行事はまず地鎮祭が「大嘗宮の儀」の 7 日前に行われる。祭員には神祇官の中臣、忌部並びに稲実卜部、禰宜卜部、悠紀主基両国の国司以下稲実公、造酒童女、灰焼などの雑色人があたる。夜の儀のため、まず童女が火を鑽り始め、稲実公が火を鑽り出し、灰焼が火を吹いて、国司や郡司の子弟が持つ松明に移す。その 8 人の子弟が松明を掲げて斎場に立ち、工人が東西 21 丈 4 尺（約 65 メートル）、南北 15 丈（約 46 メートル）を測って宮地（みやどころ）とする。これを半分に分け、東を悠紀院、西を主基院とする。

そして、稲実卜部が童女を率いて、宮地の四隅と中央、四方の門に食薦（すこも）を敷き、幣物と神饌を献ずる。その順序は図の通りで、「い」「ろ」「は」「に」「ほ」が悠紀、「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ホ」が主基の順序である。祝詞は卜部が南門の内に入って奏上する。両国の童女が木綿を付けた榊を捧げ、これから両殿が建つ四隅と、門が立つところに挿し立てて斎鍬（いみくわ）で 8 度穿（うが）つ。こうして地鎮祭が終了すると、諸工が一斉に建設に取り掛かる。

大嘗宮の様式は『貞観（じょうがん）儀式』と『延喜式』に詳細な記載があ

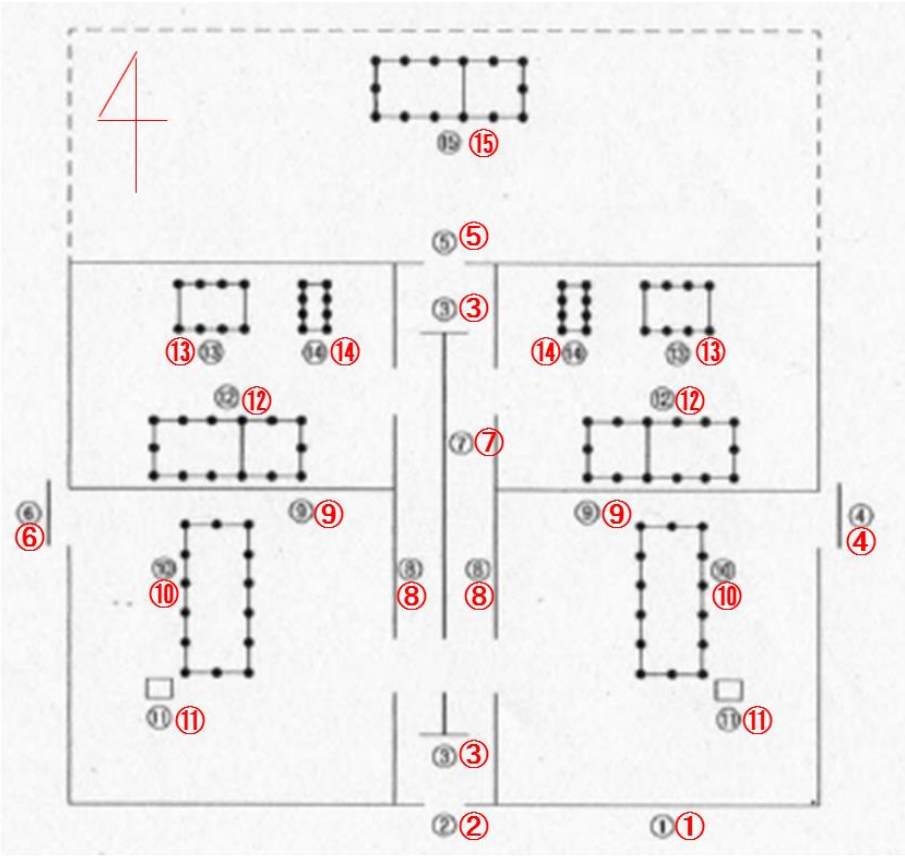
る。図は『貞観儀式』に依ったものである。

大嘗宮平面図-1



神社のいろは　要語集　祭祀編（扶桑社）

大嘗宮平面図-2



神社のいろは　要語集　祭祀編（扶桑社）

・①宮垣、②正南（まみなみ）の門、③屏籬（かくしまがき）、④正東少北（まひがしよりすこしきた）の門、⑤正北（まきた）の門、⑥正西少北（まにしよりすこしきた）の門、⑦中籬（なかのまがき）、⑧悠紀主基の中垣、⑨中垣、⑩正殿（しょうでん）、⑪御厠（みかわや）、⑫膳屋（かしわでや）、⑬臼屋（うすや）、⑭神服柏棚、⑮廻立殿（かいりゅうでん）。

これらを祭日 3 日前までに、5 日間で竣工する。更に外院として、皇太子帳、親王帳、大臣以下参議以上帳、五位以上帳、小斎（おみ）の人（卜定によって選ばれた神事に奉仕する人）の帳などが祭日 1 日前までに建てられる。

正殿の様式は『延喜式』に依ると、南面妻入り、黒木作り、萱葺（かやぶき）屋根である。間取りは 2 室で、地に草を敷き、竹簀（たけのす）を置いて床とする。室（へや）と称する奥の間には、更に蓆（むしろ）を敷き、堂と称する前室との間仕切りに蓆戸を設け、内側に帳として麻布を垂れる。奥の間の壁は草を芯として両面を蓆で化粧し、前室は壁の代わりに蓆障子を設け、外側に葦簾（あしのすだれ）を掛けたものである。このように、奥の間が薄暗い部屋であるのに対し、前室は開放的である。

竣工すると、宮殿に災害が無いように祈る大殿祭（おおとのほがい）や、宮城（きゅうじょう）に入ってくる邪神を祓うために上代に行われた御門祭（みかどまつり）が行われる。

(1)大嘗宮の造り

祭日 3 日前までに、5 日間で竣工し、終了後は取り壊すので、神宮御遷宮のような白木ではなく、黒木作りの簡素な建屋である。

帳として麻布を垂れるが、機能的な面もあるだろうが、麻というのは重要である。

7：供神物の供納

北野斎場の内院や神服院で調えられた白酒、黒酒、御贄、神服は、卯日の当朝、巳刻（午前 10 時頃）に斎場から出され、大嘗宮に供納される。その徒歩行列は総勢 5,000 人にも達する。この時刻、天皇は宮殿で大忌の御湯（おんゆ）を使われる。

この行列では一種の神籬（ひもろぎ）とも考えられる標山（ひょうのやま）が曳かれる。御飯の御料である御稲（みしね）は輿（こし）にて舁（か）かれ、造酒童女のみは輿にて供奉する。列に加わっている諸人は、賢木（さかき）や白杖（しらきのつえ）、青竹などの執物（とりもの）を手にし、供物の品々は日蔭蔓（ひかげのかずら）や草木、花などで飾られ、物を頭に戴く女もいる。行列の前部が神供の品々で、後部は両国からの貢物などである。

北野斎場を出発し、宮城の北から渡って来たこの大行列は、宮城の北門であ

る偉鑒門前で左右に分かれ、悠紀は宮城東の大宮大路を、主基は西の西大宮大路を通って七条まで南下する。そして、中央の朱雀大路に向かって合流し、悠紀はその東側を、主基は西側を北上し、未刻（ひつじのこく：午後 2 時頃）に宮城の南門である朱雀門に達する。ここで、神祇官から出発して来た阿波の麁服が行列に加わる。そこから朝堂院の第一門である応天門を経て、第二門の会昌門に入り、行列の前部と後部に分かれる。前部はそこで神祇官の祓を受け、その先導に依り大嘗宮へと向かう。後部は会昌門前で停止し、その捧持してきた品々は翌朝までに豊楽院の庭上に陳列される。

前部は大嘗宮の南門に至り、そこから悠紀は東に回る形で北門に向い、主基は西から回り込んで、再び合流する。その行進の前に、両国の神服の男女の一団が酒柏（さかかしわ、酒を飲むための器）を各膳屋に納め、行列が合流した後に、繪服と麁服が両殿の神座に奉納される。続いて、他の供神物や祭器具などがそれぞれの膳屋、臼屋などに納められ、供納の儀は終了となる。

その後、悠紀殿で供御の御稲の奉舂（ほうしょう）が始められる。まず造酒童女が稲を舂（つ）き、酒波以下が皆で舂き終わる。この間に稲舂（いねつき）歌が詠まれる。そして、古くから膳（かしわで）のことに携わってきた高橋・安曇の両氏が酒部（さかべ）・膳部を率いて御飯を炊き、神膳を調理して盛殿（もりどの：膳屋の一室）に備える。

(1)繪服と麁服

繪服と麁服が両殿の神座に奉納されることから、これらは神がお召しになる服であって、陛下はお召しになれない。

(2)安曇氏

海洋民・安曇氏は古くから膳に携わってきたというから、単なる海洋民ではない。すなわち、豊穣神を祀るからこそ膳に関われるのであり、その豊穣神とは豊受大神である。つまり、海部氏と最高神を同じくする。

高橋氏は第 8 代・孝元天皇の第 1 皇子、大彦命を祖とする一族で、いわゆる欠史八代だから、海部氏系大王の血統である。

8：大嘗宮の儀

内裏から廻立殿に渡御（とぎょ）した天皇は浴湯（ゆあみ）なさる。これを「御湯殿の儀」「小忌御湯（おみのおゆ）」と言い、この後、戌刻（午後 7～9 時頃）に祭服に着替えて悠紀の正殿に渡御なさる。御巫（みかんなぎ）、猿女（さるめ）、中臣、忌部が左右に前行し、大臣が天皇の直前を行く。天皇は菅蓋（すげかさ）を差し掛けられ、脂燭（ししょく）で足元が照らされる中を、徒跣（とせん：素足で歩くこと）で葉薦（はごも）の上を進みなさる。そして、悠紀の正殿にお入りになると、一旦、中戸の外に南面して著御（ちゃくぎょ）なさる。

次いで、伴（とも）・佐伯の両氏が南門を開き、群臣が会昌門から参入する。この参入の時、隼人が犬声（悪霊を祓う呪力があると信じられた蛮族の発声）を発する。そして、吉野の国栖（くず）に依る古風（いにしえぶり）、悠紀・主

基両国の歌人に依る国風（くにぶり）、美濃・丹波・丹後・但馬・因幡・出雲などの語り部に依る古詞（ふるごと）が奏され、最後に隼人の風俗歌舞（くにぶりのうたまい）が奏される。

歌舞が終わると、皇太子以下が帳舎を出て庭中に跪き、まず皇太子が八開手（やひらで）を打って退下、続いて親王以下五位以上、六位以下の順で一斉に八開手を打って、五位以上は再び帳に着く。これらの次第から、南面の座は歌舞や拝礼を受ける座と言える。

その後、神膳を運び込む行立（ぎょうりゅう）となり、本儀中の本儀である天皇親祭となる。神前行立は亥刻（午後 9 時頃）に膳舎を発つ。その行列は以下の通り。

・脂燭：膳部の伴造（とものみやつこ）。
・削木（けずりぎ）：采女朝臣（うねめのあそん）。警蹕（けいひつ）を発する。
・竹杖（たけのつえ）：宮主卜部。
・海老鰭盥槽（えびのはたのあらいふね）：水取連（もいとりのむらじ）。
・多志良加（たしらか）：手水用の水を入れ、注ぐ器。水取部（もいとりべ）。
・楊枝筥（ようじばこ）：典水采女（もいとりのすけうねめ）。
・御巾筥（おんくなごいばこ）：典水采女。
・神食薦：陪膳采女。
・御食薦（みすごも）：後取（しんどり）采女。
・枚手（ひらて）筥：手長（てなが）采女。
・御箸筥：手長采女。
・御飯（ごはん）筥：手長采女。
・生魚（なまもの）筥：手長采女。
・干魚（からもの）筥：手長采女。
・菓子（このみ）筥：手長采女。
・蚫汁漬（あわびのしるづけ）：高橋朝臣。
・海藻（めの）汁漬：安曇宿祢。
・空盞（こうさん）：盃。膳部 2 人。
・御羹（おんあつもの）八足机：膳部 2 人。
・御酒（みき）八足机：酒部 2 人。
・御酒（御直会、おんなおらい）八足机：酒部 2 人。

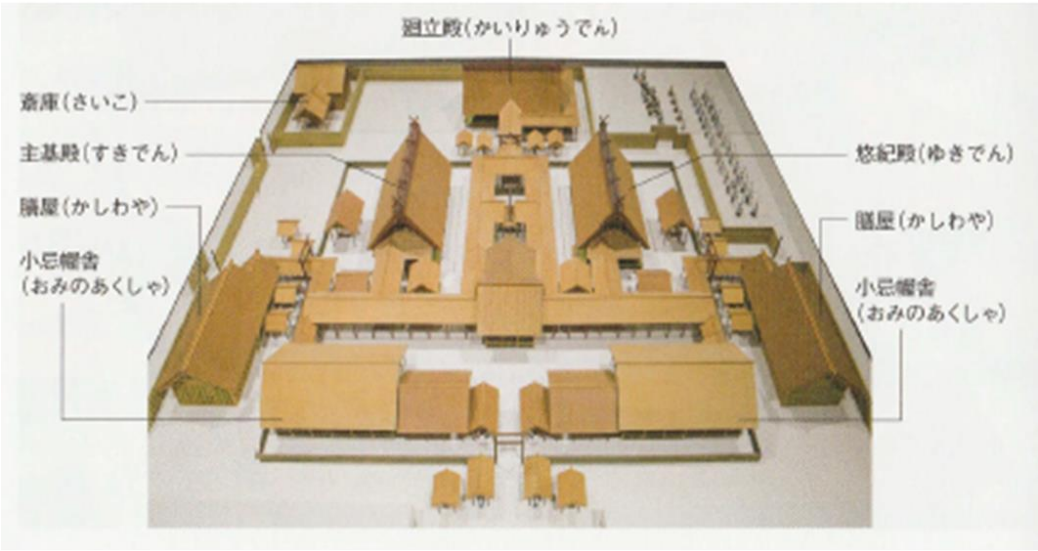
そして、采女十姫が殿内に入り、中戸口前まで進んで V 字型に雁列して控え、その他は殿内にとどまる。次に、典水采女 2 人が内陣に入り、御座（ぎょざ）に着いて御手水を供す。続いて、陪膳・後取の采女が入って、神食薦、御食薦を敷く。この後、後取采女は中戸口の所で、枚手筥以下を順次、手長采女から受けて陪膳に渡す。更に、南戸口に於いて、手長采女は高橋朝臣や膳部など内膳の 10 人から交互に汁漬以下を受けて後取采女に渡す。

こうして天皇の御親供（ごしんく）、御直会の儀があり、直会が終わると、神饌の撤下も同じように行われる。そして、再び御手水があり、天皇は廻立殿に

還御（かんぎょ）なされ、悠紀殿の儀は終了となる。この還御は亥 4 剋（午後 1 1 時頃）である。

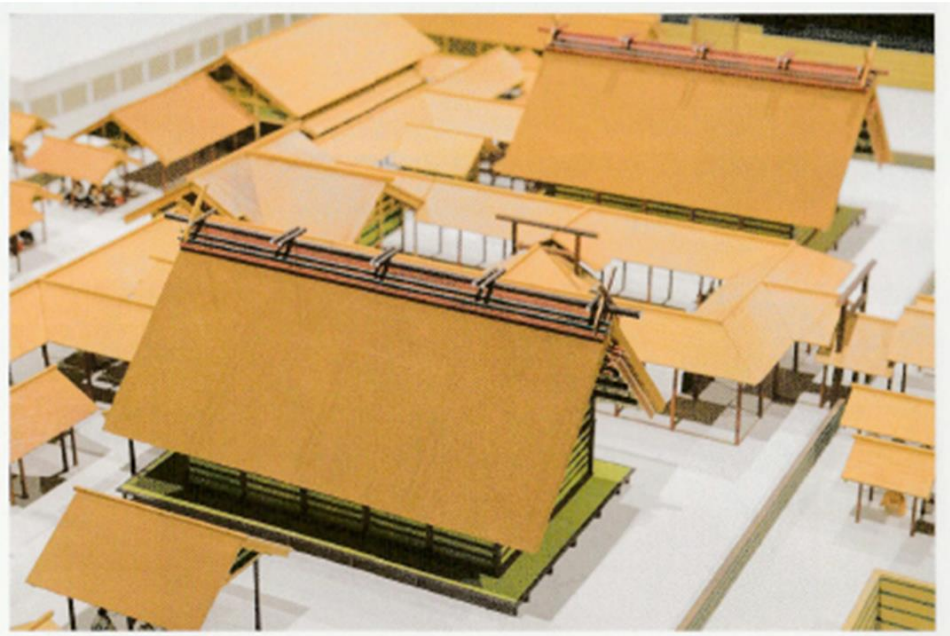
引き続き主基の儀となり、神祇官人は内膳の膳部などを率いて主基の膳屋に移り、悠紀と同様に稲舂より始めて神膳を調理する。天皇は丑 4 剋（午前 3 時頃）に主基殿に渡御なされ、悠紀と同じ次第で御儀をなされ、寅 4 剋（午前 5 時頃）の日の出に近い時刻に終了する。

大嘗宮模型-1（南側より）



神話のおへそ　古語拾遺編（扶桑社）

大嘗宮模型-2（東側より）



神話のおへそ　古語拾遺編（扶桑社）

(1)天皇の御親供、御直会の儀の詳細

ここでは天皇の御親供、御直会の儀の詳細については触れられていないので、そこを補足・考察する。

①小忌御湯と天の羽衣

まず、これらの儀に先立って行われる浴湯について。大嘗祭では大変な潔斎が成されるが、とりわけ小忌御湯では、“天（あま）の羽衣”という衣を纏われて湯槽にお入りになり、湯の中に衣を脱ぎ捨ててお出になる。生（き）の明衣（あかは、みょうえ）を着用して水を拭われ、斎服にお着替えになって大嘗宮に向かわれる。悠紀殿と主基殿で二度儀式があるので、この小忌御湯も 2 回行われ、天の羽衣、生の明衣も 2 着ずつ用意される。

この天の羽衣は丹後の天女伝説に由来する。水浴していた天女は羽衣を脱いで水浴したがために、天上に帰れなくなった。対して、大嘗祭では天の羽衣を着て水浴する。水浴は神聖な禊であり、その場で天の羽衣をわざわざ纏われるということは、天上界の力を身に纏うということである。それにより、神と直接対峙して神祭りすることが許され、天子の威霊を体得するのである。この天女とは、根源神たる丹後の豊受大神の暗示である。

それを証明するような歌がある。万葉集・巻 1－28 にある持統天皇の歌である。（関裕二著、『「女帝」誕生の謎』、講談社。）

“春過ぎて　夏来にけらし　白栲（しろたへ）の　衣ほすてふ　天香具山”

天香具山は聖なる山のはずなのに、洗濯物が干してあることなどおかしい。天香具山の土が重要な呪具として用いられ、神武東征時に天香具山の土で天平瓮などを作り、天神地祇を祀り、敵を呪ったところ、敵は自ずから平伏した。つまり、天香具山を手に入れた者がヤマトの王になれたのである。これは、天香具山＝天香語山（眞名井原）の土はヤマトの国の物実（ものざね）で、ヤマトの国の魂そのものだからである。

だから、この歌では衣を干したのではなく、実は“天女＝豊受大神の天の羽衣を手に入れる”ことを宣言していたのであり、ここで詠われている“衣”とは“天の羽衣”のことなのである。言い換えれば、王権の象徴とも言える天香具山の土を手に入れ、神祭りが許される“天の羽衣”を纏うことにより、名実共に祭司王となる願望を詠っているのである。

②拍手の作法

皇太子、親王以下五位以上、六位以下の順で一斉に八開手（やひらで）を打つ。八開手とは、跪いて行われる八拍手を 4 回、計 32 回の拍手である。

これを、明治以降簡素化したものが、現在神宮の祭祀でも行われている八度拝であり、更に簡略化したものが二拝二拍一拝である。

③天皇親祭の重儀

天皇の御親供、御直会の儀は、言わば秘儀である。以下、神社新報第 3049 号

及び神社新報第 3429 号の國學院大學教授・岡田荘司氏に依る詳しい考察を紹介する。

◆神社新報第 3049 号

平安時代など、天皇が幼い場合は天皇に代わって摂政がいろいろ執り行うが、大嘗祭も例外ではなかった。そうすると、摂関家は大嘗祭の式次第についても知っておかねばならず、知らなければ摂関家としての資格が無い、とまで言われ、鎌倉時代には摂政を解任されることもあったという。

例えば、摂関家の二条良基が記した『永和度大嘗会記』には“神膳の次第は人の知らぬ見ぬ事なれば、しるし申すに及ばず、天神地祇を天子の手づから祭らせ給て、神供を供え給ふとぞ受け給はる”としている。つまり、天皇が御親（おんみずか）ら天神地祇をお祭りし、神饌をお供えする。そのお供えの仕方は、天皇のみが知ることである、ということである。

神祇官で亀の甲羅を焼いて占いをし、神官家として発展した卜部氏が記した『宮主秘事口伝』にも“神饌供進、第一之大事也、秘事也”とあり、神饌の供進が最も重要で秘儀である、と言っている。

関白家・一条兼良は『代始和抄（だいはじめわしょう）』で“卯日は神膳を供せらる、其儀ことなる重事たるによりて委しるすに及ばず”とし、神饌が最重要で詳しく記すことができないとしている。そして、天皇しか知ってはならない儀式作法、しるすに及ばずという作法は、御食事を差し上げるための丁重な順番と詳細な作法のことである。また、“嘗殿と云は板敷を敷かず筵（むしろ）を敷く”とあり、大嘗殿は素朴で、神膳を供する所、御食事を差し上げる所である、と書いてある。

吉田神道を創始した吉田兼倶（カネトモ）も『代始和抄』の追文で“神膳御供進の次第は天子の御灌頂一朝の重事なれば、事々に秘事口伝にあらずと云事なし”とし、大嘗祭に於ける神膳の供進の次第は重事であり、これら 1 つ 1 つが秘事口伝としている。そして、“主上手づから親ら盛り給ふに、ことさら御口伝のある事とも、深き子細あり”とも記しており、やはり天皇が御親ら神饌をお手盛りされること自体が秘儀なのである。しかし、いわゆる真床御衾（まどこおふすま）に関する記述は一切無い。

また、大嘗祭の具体的な内容は、宮内庁書陵部が平成元年 3 月に刊行した『図書寮叢刊』に採録され、初めて活字で公開された『大嘗会卯日御記』からも伺える。例えば、4 歳の崇徳天皇の大嘗祭について摂政・藤原忠通が書いた記録に神膳供進の式次第が詳しく出てくるが、やはり真床御衾の儀式については一切記されていない。

大嘗祭では天照大神と天神地祇をお迎えすると思われるが、天照大神だけは天皇が御親らお祭りする神だった。神膳を進める所作では「おお」と称唯（いしょう）する応答を、天皇御親らが行われる。『江家次第』には“天皇頗（すこぶ）る低頭す、拍手称唯す”とあり、『江記（ごうき）』には“天皇拍手少しく低頭す、粛敬す、又称唯あるべきかな”などの言葉が注記で入っている。称唯とは、宮中で天皇に召された官人が口を覆って「おお」と応答することで、下

位の者が上位の者に対して行う服従の作法である。（本来は“しょうい”が正しい読みだが、“いしょう”と転倒して読むのは、“譲位”と音が似ているので、それを避けたものと言われている。）だから、天皇が臣下に対して行うことはあり得ない。天皇が行う場合は唯一、皇祖の天照大神に対してのみである。天皇は神迎えを行い、神に従う作法をするのが、天皇の神への真摯な作法である。天皇御親らが神になる作法ではなく、とにもかくにも丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしするのである。これこそが、天皇一世一代の大嘗祭の秘儀であり、現在の神道祭祀の作法に通じているのである。

◆神社新報第 3429 号

『後鳥羽院宸記』では、供えられる神饌のうち、御飯には稲の他に粟もあることが挙げられ、これこそが「秘事」であると書かれている。天皇から天皇へ伝えられる作法の書に「秘事」と記されている意義は大きい。大嘗祭の意義とは、中央の神座で何かあるということではなく、主にお食事の作法と内容、特に粟の御飯が入るということだったと言える。

歴史的にも、地方税である租は神社の祝儀などにも用いられ、稲で納めるのが基本だった。一方で、稲の生育は天候に左右されるため、古代ではどうしても準備できない場合には粟で納めても良かった。また不作に備え、「義倉（ぎそう）」という穀物倉に粟を納めてもいた。

あまり指摘されないが、神話でも粟や稗（ひえ）などを陸田で作っていることが描かれている。粟はおいしくはないが、腹持ちのする食べ物で、飢饉対策には最も適していると言える。古代の人々が生きていく場合、稲が大事なのはもちろんだが、粟を以て代用してきたことにも目を向ける必要があろう。

現在、天皇陛下には御所で稲だけでなく粟も育てられているという。新嘗祭にも大嘗祭にも稲と粟が用いられることは、古代から一貫している。天皇が大嘗祭で稲と共に粟も食されるのは、「おおみたから（百姓）」である国民が、稲だけではなく、粟も食べていかないと生きていけなかったからではないかと考える。故に、稲の祭りと共に、今では食べている人はほとんどいなくても、粟の祭りが行われているのである。

このように、岡田教授は述べられている。すなわち、大嘗祭の秘儀とは、神饌としての粟と、決して間違えることの許されない神饌供進の手順に他ならず、それ以上のものでもそれ以下のものでもない、ということである。

ここで、秘儀とはされているものの、手掛かりとなるのが新嘗祭である。大嘗祭は即位後初めての新嘗祭であることから、儀式としては基本的に同じはずである。詳しくは、以下を参照して頂きたいが、重要な部分を抜粋する。

http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-entry-20.html

陛下は御手水の後、神宮の方向の神座の御前に正座され、神饌を御親ら供される。枚手にピンセット型の竹箸を用いられ、古来の定め通りの順で供される。御親供が終わると御拝礼され、御告文（おつげぶみ）の奏上があり、皇太子は

座を立たれ、母屋御扉口御幌前の拝座に着かれ、礼拝される。続いて参列者が正面階下で拝礼する。
　御告文を奏されると御直会となり、陛下は御米飯、御粟飯、白酒、黒酒を聞し食される。これは神人共食で、神と共に新穀を聞し食すことにより、新穀に宿る穀霊を体内に取り入れるわけだが、これは太陽の恵みを受けて育ったから太陽神の霊威であり、天照大神の皇孫ニニギノミコトとしての天皇霊威の更新に他ならない。故に古来、陛下が新穀を聞し食されるまで、庶民は新穀を口にすることはしなかったのである。
　御直会の後は、陪膳采女以下の奉仕で神饌が下げられ、再び殿内の御座にて御手水の後、還御となる。

・ピンセット型の竹箸
　古代インカでは、太陽神に使える巫女は毛抜き用ピンセットで陰毛を抜かれ、掻把器で陰部を開いて太陽に向けられた。これは、太陽神の霊威を宿すというものである。この場合の太陽神は男神だが、古代インカでは中南米の最高神ククルカン＝ケツァルコアトルである。環太平洋文明圏を考慮すれば、このような影響は大いに考えられる。

　箸の話としては、大物主神が蛇だと判った倭迹迹日百襲姫（ヤマトトトヒモモソヒメ）が陰部を箸でついて死んだ話があり、陰部をついて死んだ話としては、天照大神あるいは機織り女の稚日女（ワカヒルメ）が機を織っていた時にスサノオが皮を剥いだ馬を投げ入れたのに驚いて梭（ひ）でホト（陰部）をついて死んだ話があるが、ともに陰部をついて死んだことに着目すると、倭迹迹日百襲姫と天照大神は同義と見なせる。倭迹迹日百襲姫はこの逸話から箸墓に葬られているとされ、それはまた卑弥呼とも言われ、卑弥呼は豊穣神・豊受大神と共に太陽神・天照大神を祀っていたことからも、倭迹迹日百襲姫と天照大神には深い関係がある。

　また古代、箸には使った人の霊力が（唾液によって）宿るとされたから、陰部を箸でついたことは男神との性的交わりを暗示し、ワカヒルメの話の“梭”は“日”に通じるから、これも男神の太陽神との交わりを暗示する。それは、太陽神の子＝日の皇子を宿すことをも意味する。そして、この機を織っていたのは新嘗祭の時で、古代の新嘗祭はほぼ冬至の頃だった。冬至は太陽（神）の神威更新とされ、古代の新嘗祭は太陽神の霊威を新穀と共に頂くことにより天皇霊威を更新するという意味合いがあったから、そういう意味からしても、ワカヒルメの話は太陽神との一体化に依る霊威更新と言える。
　ワカヒルメの話にはスサノオが関係しているが、そのスサノオが出雲に降りた時、斐揖（ひい）川の川上から箸が流れてきたことによって、人が居ることを知った。箸を流したのは、使った人の霊威が宿っているからで、他の人が使わないようにしたためである。そして、“ひい＝ひぃ＝日”で、これも太陽神を暗示している。
　すなわち、ピンセット状の竹箸は太陽神の霊威を授かることを暗示しており、

その箸で供された新穀を神人共食することも併せて、日の皇子の証ということである。

なお、“天皇が御親ら神饌をお手盛りされること自体が秘儀”ならば、一体、誰が新天皇に大嘗祭での秘儀を伝授するのだろうか？それはおそらく、内陣に入る典水采女である。（陪膳采女もか？）新嘗祭でも采女が陛下の側で御用を勤め、日頃の宮中三殿内陣でのご奉仕も内掌典が務めることからすれば、妥当である。

④悠紀と主基

悠紀の神前行立は亥刻（午後 9 時頃）に膳舎を発ち、終了後の還御は亥 4 剋（午後 11 時頃）である。また、主基では、丑 4 剋（午前 3 時頃）に主基殿に渡御なされ、悠紀と同じ次第で御儀をなされ、寅 4 剋（午前 5 時頃）の日の出に近い時刻に終了する。かつての新嘗祭の夕（よい）の儀が午後 10 時頃、暁（あかつき）の儀が午前 4 時頃に成されていたことからすると、大嘗祭は新嘗祭の古儀そのものである。新嘗祭はかつて冬至の日没から忌籠って太陽神の霊が憑りつくのを待ち、陽がまったく果てた午後 10 時から深夜にかけて太陽神の霊威が籠る稲魂を頂いて霊性を養い、更に忌籠った上で、暁の頃に再び稲魂を頂いて霊性を完成し、太陽の復活と共に、若々しい日の皇子として顕現する、というものである。

そして、この夕と暁の両儀は、神宮神嘗祭（かんなめさい）の由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ、午後 10 時）と由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ、午前 2 時）に由来するが、暁の儀は神嘗祭の方が一足早い。その理由は、天皇が霊性を更新されるに先立ち、その霊威の根源である天照大神の神威が更新されなければならないからである。それは、崇神天皇の時代まで、宮中のみで天照大神が祀られていたことからすると、かつては神嘗祭と新嘗祭は一体の形で行われていたものと推察され、故に、天皇霊威の更新に先駆けて天照大神の霊威が更新されなければならないためである。

では、大嘗祭では何故、悠紀が優先されるのか？そもそも、悠紀とは神宮神嘗祭の由貴夕大御饌、由貴朝大御饌の“由貴”に由来し、由貴とは“齋忌（ゆき）＝最も清浄で立派な神饌”という意味である。そして、主基殿の“主”とは“主体”ではなく、“次のもの”という意味である。

神宮との対応からすれば、悠紀は（御遷宮を除いて）すべて優先される外宮に、主基は内宮に対応する。前述のように、深夜に太陽神の霊威が籠る稲魂を頂いて霊性を養うことは、食を司る豊受大神の外宮に相当し、暁の頃に霊性を完成して日の出（太陽の復活）と共に皇子として顕現することは、太陽神的な天照大神の内宮に相当する。外宮が豊受大神＝根源神を祀り、それ故に外宮先祭として優先されるならば、外宮に対応する悠紀もまた、内宮に対応する主基に対して先祭となる。

⑤麁服と真床御衾、粟

麁服と真床御衾に関して巷に流布している説（飛鳥昭雄氏の説）として、大嘗祭で陛下は麁服を纏い、真床御衾にくるまれて神の座で寝て起き上がり、それがイエス・キリストの“最後の晩餐→死→復活”の再現だ、というものがある。しかし、それならば、まず神人共食があって後、これらの儀式があるべきだが、そうではない。

この秘儀説の元は、昭和の大嘗祭の際に折口信夫氏が神話と照らし合わせ、『國學院雑誌』の誌上で立てた説である。その神話の場面は、ニニギが高千穂に降臨する際、真床御衾に覆われて（あるいは着せられて）いたことである。そして、大嘗祭を行う大嘗殿の内陣中央には八重畳の上に白の御単・御衾（おふすま）が置かれた神座が用意されることから、特に昭和 40～50 年代の超能力やオカルトブームで秘儀説の注目度が高まった。しかし、折口氏の師である柳田国男氏は、そのような説を認めていない。

まず第一に、大嘗祭は悠紀と主基でまったく同じように行われる。仮に、真床御衾が折口説のようなニニギの天孫降臨の秘儀の場である場合、1 回だけ行えば良く、2 回も必要無い。同様に、“最後の晩餐→死→復活”の再現ならば、これも 1 回だけで良い。また、神饌を神に供した後、天皇は祝詞を奏上して神と直会を行い、供した神饌を天皇御親ら聞し食す。これは、“秘儀”が無事終了した後に成される御食事であり、御食事されてから“秘儀”を行うわけではない。つまり、“最後の晩餐→死→復活”という順を再現しているわけではない。大嘗祭は確かに天皇一世一代の秘儀ではあるが、その本質は、新しく日の皇子になった天皇が、新穀を神に感謝すると同時に、丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしして霊威を頂く特別な新嘗祭なのであり、それ以上の秘儀ではない。

第二は、麁服である。これは繪服と共に神座に奉納され、神がお召しになる服であって、陛下はお召しになることはできず、まして、神座は神が坐す場だから、陛下が立ち入ることは許されない。麁服については、麁服を調進している三木家第 28 代当主の三木信夫氏がまとめた内容が紹介されている。

http://park17.wakwak.com/~happyend/namiawa/anonamikaze/awa16/a16_03.html

“大嘗祭の中心行事は大嘗宮の儀で、麁服は入目籠に入れ、繪服は入細目籠に入れて神衣（かむそ）として悠紀・主基の神座に祀り、その他の神饌を供え、悠紀・主基の田の新殻をもって天照大神及び天神地祇を奉祭され、自らも食する等、天子の威霊を体得する為の神事の儀式です。

大宝律令の神祇令に「凡そ践祚の日，中臣は天神の寿詞（よごと）を奏せ、忌部は神璽鏡剣（しんじのかがみつるぎ）を上（たてまつ）れ」とあるように、京師の忌部は大嘗祭の都度、皇位の印である鏡と剣を作り奉っていたのですが、1036 年、第 69 代・後朱雀天皇を最後に廃止となり、中臣の寿詞だけとなります。本来の八咫鏡は伊勢神宮で祀られ、天叢雲剣は熱田神宮のご神体として祀られています。

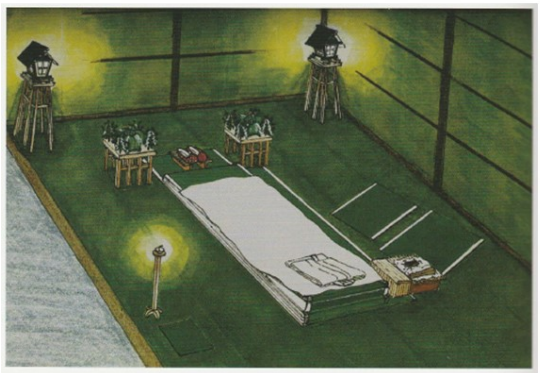
麁服とは、天皇が即位後初めて行う一世一度の大嘗祭においてのみ使用する、阿波忌部が織りあげた麻布の神服（かむみそ）を言うのです。麁服は天皇自身が着るのではなくて、天皇が神衣として最も神聖なものとして、天照大神にお供えする物です。上古より阿波忌部の氏人が製作するから麁服なので、忌部以外の人達が作成すれば、それはただの麻織物なのです。現在は 4 反ですが、昔はもう少し少なかった様です。”

やはり、麁服は天皇がお召しになるのではなく、神にお供えするものなのであり、また、「服」とは言っているものの、実際は織り上げた反物である。つまり、真床御衾は神が降臨する場、神座（上座に通じる）であり、神ではない天皇は入ってはならない、触れてはならない場所なのである。そして、反物だから、天皇が直接お召しになることはできない。

また、大嘗祭は特別な新嘗祭なので、新嘗祭での母屋の舗設を見ると、神座、寝座、御座（陛下が座られる場所）があり、神座は黄端の短畳（たんじょう）、御座は白端の半畳で、神座と御座は相対して神宮の方向（現在は西南）に設けられる。寝座は神座・御座の東、母屋のほぼ中央に南北に敷かれる。薄帖（薄い畳）を何枚も重ね敷き、南に坂枕（さかまくら：薦（こも）で作られた頭を乗せる部分が斜めになっている枕）を置き、羽二重袷（はぶたえあわせ）仕立ての御衾が掛けられる。その端には女儀用の櫛、檜扇（ひおうぎ）、沓（くつ）などが置かれ、古くはこれを「第一の神座」と称した。

大嘗祭もこれに類しているはずであり、この寝座に掛けられる御衾を真床御衾と解釈するならば、この寝座の端には女儀用のしつらえが成され、神座と御座は相対して神宮の方向に設けられる。そして、新嘗祭は神嘉殿（しんかでん）のみで斎行されるから、新嘗祭で降臨する神とは、皇祖神で女神の天照大神をおいて他に無い。これが大嘗祭となると、悠紀は豊受大神、主基は天照大神なのだろう。（共に女神であらせられる。）

従って、“真床御衾の秘儀”などは存在し得ない。（以下、寝座図。）

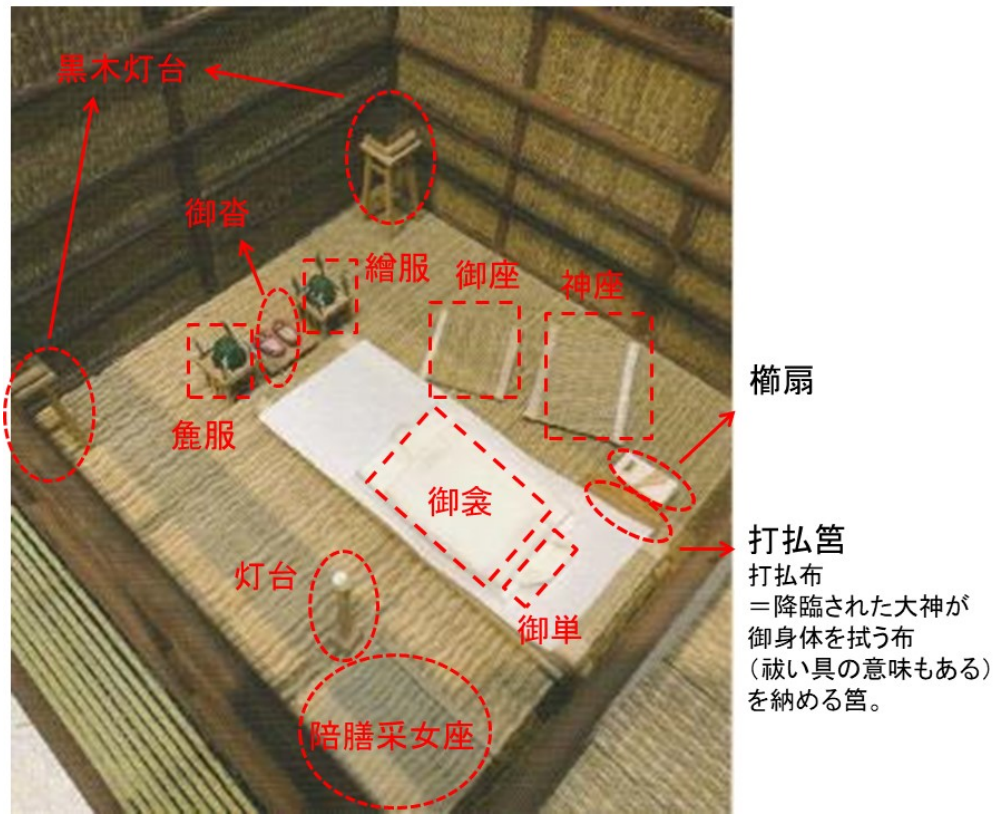


1　大嘗宮悠紀殿内部の復元図（中嶋宏子画）

2　近世大嘗宮復元模型内部（國學院大學博物館所蔵）

『大嘗祭と古代の祭祀』、岡田荘司著、吉川弘文館

前記 2 拡大図



三木氏に直接伺ったお話では、“神は麁服に降臨する”という。これが真実ならば、繒服は不要ということになってしまうので、その真意を考えよう。

大嘗祭に於ける神饌の秘儀は米と粟、特に粟にあり、神服は絹の繒服と麻の麁服である。本格的な稲作と絹は大陸からもたらされたとされるが、粟は稲作に先立ち栽培されており、また、麻は世界最古の繊維作物とされ、縄文時代の遺跡からも出土している。つまり、粟と麻は、米と絹に先立って栽培されていた衣食住を満たす重要なものであり、言うなれば、粟と麻は悠紀、米と絹は主基に相当する。

また、かつて米は貴重で、飢饉の時には粟で凌いだ。だから、米は高貴な方、粟は庶民に相当し、同様に、絹は貴重で高貴な方の、麻は庶民の服だから、米と絹は高貴な方、粟と麻は庶民のシンボルである。高貴な方の代表は天皇だから、これは言わば天皇と庶民＝国民の関係であり、日本は古くから天皇が親、民が子という大きな家のような君民一体の統治機構で、天皇は民（＝粟、麻）無くして存在し得ない。そして、麁服の麻が阿波のものに限定されるのは、阿波＝アワ＝粟の意味が込められているからである。

更に、三木氏に依れば、かつて元伊勢・籠（この）神社第 82 代宮司に祭祀をいろいろ教え、自らの邸宅内で祭る神の御霊は、邸宅の北東の部屋にあるという。北東はウシトラの方角だから、当然この神はウシトラノコンジン＝豊受大神で、それを裏付けるかの如く、阿波という地名は豊穣神オオゲツヒメに因み、それは豊受大神に他ならない。そして、弥生海人大王家の血統の籠神社宮司に

祭祀を教えたとなれば、阿波忌部氏である三木氏は弥生海人（＝邪馬台国）の祭司氏族であり、だからこそ、粟に繋がる阿波忌部氏の栽培する麻で縫製された麁服が重要で、これが“神は（麻の）麁服に降臨する”という真意であろう。
　また、絹や木綿は織りやすいが、麻は極めて織りにくく、織目が飛んでしまい、慣れない一族には困難である、とも言われていたので、これも他の一族にはできない理由の１つだろう。
　なお、三木家は御殿人（みあらかんど）という特別殿上人で、皇室から麁服作成を命令されるのではなく、依頼されることから、皇室とは対等の立場であり、従って、麁服は「献上」するのではなく「調進」するのである。

　結局、外宮に相当する悠紀殿と、内宮に相当する主基殿の両方で同じ儀式を斎行する大嘗祭とは、豊受大神と天照大神は“二神一座、一神二座”の関係にあり、“豊受大神　亦名　天御中主神　亦名　天照大神”という元伊勢・籠神社の秘伝からすれば、皇祖神の天照大神と新穀を通じて根源神である豊受大神＝天御中主神の霊威を頂く儀式に他ならない。

9：節会（せちえ）
　朝廷の饗宴を節会と言う。節会には元日節会、白馬（あおうま）節会、踏歌（とうか）節会、大嘗祭と新嘗祭の豊明（とよのあかり）節会などがあり、大嘗祭では辰日節会に続いて、巳日節会、午日節会が続行され、悠紀節会、主基節会、豊明節会とも称される。大嘗祭や新嘗祭は大嘗会・新嘗会とも書かれ、節会が重要な要素であったことが伺える。
　特に、辰日節会には中臣の天神寿詞（あまつかみのよごと）が奏され、忌部によって神璽鏡剣が奉られた。

(1)天神寿詞と神璽鏡剣
　主基殿の儀が終了した辰日の午前 7 時頃には、悠紀主基両国の倉代（くらしろ）の雑物（くさぐさのもの）が豊楽院の庭中に陳列される。両国の御帳（みちょう）が豊楽殿上の東と西に設けられ、標山が殿前に移される。

　主基の儀が終了し、大極殿に還御なされた天皇は、再び午前 6 時頃に発御（はつぎょ）し、一旦、豊楽院の清暑堂（せいしょどう）に留まりになり、辰 2 剋（午前 7 時半頃）に悠紀帳に出御（しゅつぎょ）なさる。すると、親王以下五位以上が版（へん：所定の位置）に着き、六位以下も続く。次に、皇太子が版に着く。いずれも位袍（いほう）の束帯を着用している。
　場が整うと、神祇官の中臣が賢木を取って笏に副え南門より入って版に着き、跪いて天神寿詞を奏上する。そして、忌部が入ってきて神璽鏡剣を奉る。この中臣は、多くの場合、神宮の祭主が兼ねていた。

　当時、践祚（せんそ：天皇の位を受け継ぐこと）と即位（皇位に就いたことを明らかにすること）とは分かれていなかったが、文武天皇の皇位継承は持統

天皇からの譲位を受けての即位であったため、践祚と即位が期日を別にして行われた。その後、光仁天皇から譲位されて践祚された桓武天皇もこの例に倣い、践祚から 13 日後に大極殿にて即位遊ばした。以後、これが慣例となり、践祚の際に剣璽（剣と勾玉）が一旦、新帝に渡されることになった。これが、現在まで「剣璽渡御の儀（剣璽等承継の儀）」として伝えられている。

このように、紆余曲折を経て、鏡剣の奏上は践祚の日の剣璽渡御となり、大嘗に於ける両儀も辰日に移され、中臣の天神寿詞のみが明治の大嘗の節会まで伝統される結果となった。

(2)辰日節会

天神寿詞が終わると、豊楽院の前庭に陳列されている献上品の目録奏上があり、これで一区切りとなる。

節会では、改めて五位以上の召し立てがあり、先頭の第一の人（貫首）が儀鸞門（ぎらんもん）から進み、自分の版まで練歩して着く。練歩とは、節会の時に行われる作法で、踵を地から離さず踏み定めながら進む歩き方である。他の者は貫首が版に着き終わるのを見て、順次、参進して各自の版に着く。続いて、上卿の大臣が、敷いてある座に着くことを命じる敷尹（しきいん）を伝え、群臣が一斉に二拝する。これを「謝座の礼」と言う。次に、造酒司の正（かみ）が空の盃である空盞を捧げ、跪いて貫首に授ける。貫首も跪いてこれを受け、一同と共に二拝する。これを「謝酒の礼」と言う。そして、王卿（おうけい：参議以上）が豊楽殿の殿上に昇り、五位以上は顕陽（けんよう）・承観（じょうかん）両堂に、六位以下は観徳（かんとく）・明義（めいぎ）両堂に着く。

こうして群臣たちが座に着くと、巳 1 剋（午前 9 時頃）から供膳の儀があり、白酒黒酒の儀が行われる。白酒・黒酒各八度であったり、三度であったりする。この間、両国からの献上品は群臣に頒賜され、国風の歌舞が奉じられたりする。最後は一同が庭上に降り、一斉に拝舞し、悠紀の膳である朝膳（あしたのおもの）が片づけられる。

天皇は一旦、豊楽殿の清暑堂に還御なさる。次いで未 2 点（午後 2 時頃）、主基の帳に還御し、悠紀と同様に行われる。そして、悠紀の国司以下には禄が給われる。なお、鮮味などの献上品は悠紀だけで、主基の献上は巳日となっていたことから、辰日節会を悠紀の節会とも言う。

(3)巳日節会

『延喜式』には次のようにある。

“巳日の辰の二点（午前 8 時）に悠紀の帳（みちょう）に御したまふ。三点（8 時半）に御膳（おもの）を薦め、次に和舞（やまとまい）を奏し、其の五位巳上（いじょう）を召して饗（あえ）を給ひ、及び六位巳下参入（まい）りて風俗楽等を奏すること、並辰日に同じくせよ。未（ひつじ）の二点（午後 2 時）に主基の帳に御したまふ。御膳を供ずるの後、田舞（たまい）を奏せよ。庶事、前（さき）の儀に同じくし、事（こと）訖（おわ）りて主基国に禄を賜へ。”

巳日の節会では、二献の後に、和舞が雅楽寮（うたまいのつかさ）によって奏された。舞人 10 人、歌人 10 人、琴師 2 人、笛工（ふえふき）1 人の構成で、舞人は内舎人だった。また、田舞は多治比（たじひ）氏、内舎人などが奏した。

巳日の夜には清暑堂で神宴が執り行われ、神楽や御遊（ぎょゆう：宮中で催された管絃の催し）として催馬楽の安那多布東（あなたふと）や蓑山（みのやま）が唱和された。

辰日と巳日の対照（江家次第）

辰日		巳日	
悠紀帳	天神寿詞 両国多米都物色目奏 宮内省高次枚次物進献 一献悠紀鮮味献進 二献風俗 三献和琴挿頭花進献	悠紀帳	一献風俗 二献和舞 三献
主基帳	一献風俗 二献風俗 三献	主基帳	一献主基鮮物献進風俗 二献田舞 三献和琴挿頭花進献
悠紀見参奏並賜禄		主基見参奏並賜禄	

(4) 豊明節会

豊明節会は、毎年の新嘗祭では卯日の翌日（辰日）に、大嘗祭では午の日に行われた。御宴一般のことも豊明と呼ばれたが、後には大嘗祭・新嘗祭の節会だけの呼称となった。場所は豊楽殿で、御座には御帳を徹して中央に高御座（たかみくら）が設けられ、殿前には舞台が整えられた。

午前 8 時、天皇が出御して高御座にお着になると、続いて群官が入り、庭上で謝座、謝酒の礼を行い、殿上の席に着く。次に、両国の国司と功労者の叙位が行われ、叙位の宣命（せんみょう）が下される。宣命は参議が宣命大夫を務め、天皇から賜った宣命を宣読する。内容は、両国国司以下をねぎらい、位を上げる旨を主とし、文武官中の功績者の叙位に及ぶ。次いで、式部・兵部の二省から位記（いき）が伝達され、位を叙された人が拝舞して退出。その親族も下殿して親族拝を行い、叙位が終わると饗宴となる。

まず采女の奉仕に依り、天皇はじめ皇太子の饗膳が供され、臣下の饌も大膳職によって整えられる。一献の間に吉野の国栖が歌笛を奏して御贄を献上し、二献に及んで伴・佐伯両氏が率いる舞人の久米舞があり、三献中に阿倍氏に依る吉志舞（きしのまい）がある。その後、両国国司が率いる歌人・歌女に依る風俗舞があり、五節舞となる。この舞では、まず大歌（おおうた）が数曲奏される。大歌とは、宮中の大歌所によって採用され伝授された日本古来の催馬楽や神楽歌、風俗歌である。その後、舞台で舞姫 4 人に依る舞が行われる。

五節舞が終わると、群臣一同に依る庭上での御礼の拝舞があり、次は雅楽寮によって立って行われる。立歌（たちうた）がある。そして、解斎（げさい）のための和舞が神服女 4 人によって奏される。この時、人々に柏が配られて、その柏で酒を受けて飲み、飲み終わると、柏を蔓（かづら：髪飾り）として和舞を舞う。以上が終わると、再び宣命が宣読される。

こうして、禄を受けた親王以下が再拝して退出、天皇が還御なさり、大儀は

終了となる。ここに於いて、天皇は皇祖の祭祀を受け継がれ、その霊徳を新穀を通じて親自らのものとし、諸臣にも分かち、皇位を無窮のものとなさるのである。

10：即位式と合わせての再考察

8：に於いて、大嘗祭の真意を以下のように結論付けた。

・外宮に相当する悠紀殿と、内宮に相当する主基殿の両方で同じ儀式を斎行する大嘗祭とは、豊受大神と天照大神は“二神一座、一神二座”の関係にあり、“豊受大神　亦名　天御中主神　亦名　天照大神”という元伊勢・籠神社の秘伝からすれば、皇祖神の天照大神と新穀を通じて根源神である豊受大神＝天御中主神の霊威を頂く儀式に他ならない。

ここで、令和元年（2019 年）9 月 7 日に行われた熱田神宮文化講座講演「即位式と大嘗祭」（皇學館大学文学部神道学科教授・加茂正典氏）の資料より、即位式と合わせて更に深く考察する。即位式とは、先帝譲位あるいは崩御の日に行われる践祚式＝剣璽渡御儀礼の後、日を改めて斎行される、新帝即位を内外に知らしめるための儀式である。践祚式は平安時代初頭に創出された新儀であり、それ以前は即位式と大嘗祭の 2 種の儀式・祭儀により構成されていた。即位式は正月、大嘗祭は 11 月の下の卯の日（3 回ある場合は中の卯の日）に斎行された。

(1)天神寿詞

日本書紀の持統天皇 4 年正月 1 日の条の持統天皇即位式記事には、持統天皇の即位式の様子が記載されている。そこには、「神祇伯中臣大嶋朝臣、天神寿詞を読む」とある。天神寿詞とは、聖なる水の由来を説いた祝詞である。この聖なる水とは、天眞名井（あめのまない）の水のことであり、天照大神とスサノオが誓約（うけい）を行った際の水であり、高天原から地上に降ろした水である。つまり、元伊勢・籠神社の奥宮・眞名井神社の水であり、それは外宮に遷され、限られた者以外は入れない禁足地にある。外宮では現在、上御井（かみのみい）神社として祀られ、毎朝毎夕、日別朝夕大御饌祭（ひごとあさゆうおおみけさい）に使用されている。

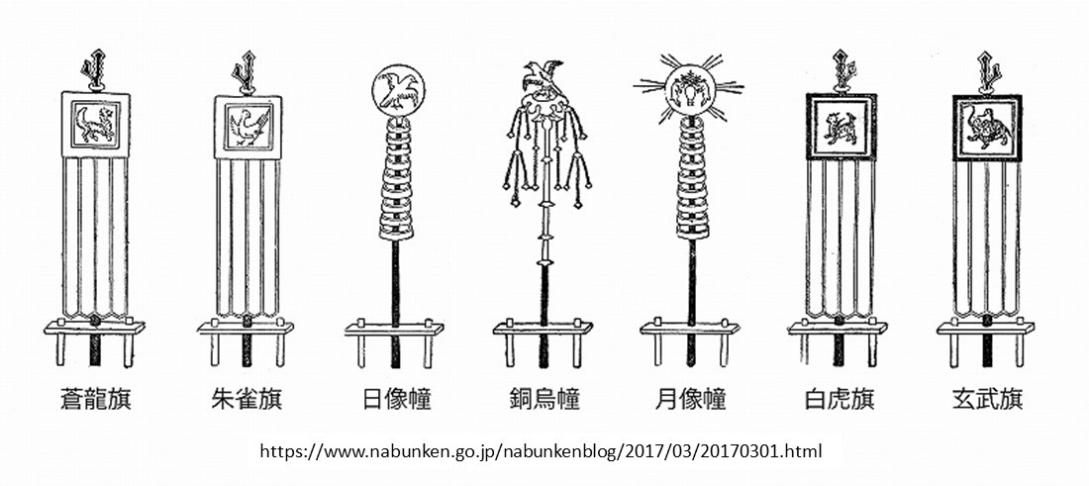
この聖なる水の由来を言祝いだ後、神璽鏡剣が奉られるが、神器に先立つほど重要な水なのである。

水を司るのは龍だが、豊受大神は龍神ともされることからすれば、天神寿詞とは、豊受大神を称える祝詞と言える。

(2)儀仗旗（ぎじょうき）

即位式前日、大極殿中階より南の十五丈四尺（約 46 メートル 66 センチ）の龍尾道の上の地点に銅烏幢（どううどう）が立てられ、その東に日像幢（にちぞうどう）、朱雀旗（すざくき）、青龍旗（せいりゅうき）が立てられる。西に

は月像幢（げつぞうどう）、白虎旗（びゃっこき）、玄武旗（げんぶき）が立てられる。日像幢は日輪の中に八咫烏がおり、月像幢は月輪の中に兎がいる。



天皇は太陽神的な天照大神の子孫とされ、3 本脚の八咫烏は太陽神を表すことから、日像幢は新帝に相応しい。それに対する月は、陰陽道的に陽の太陽に対する陰なのだが、月は欠けても満ちて無くならないことから、不死のシンボルと見なされてきた。その月にいる兎は、不死を司る神のシンボルなのである。不死＝永遠、無限であり、豊受大神は月もシンボルとすることからすれば、日輪は天照大神、月輪は豊受大神のシンボルである。

朱雀、青龍、白虎、玄武は言うまでも無く、四方を司る道教由来の四神である。その中心に位置するのは黄龍だが、それが天皇ということであり、即位式で群臣の前に御姿を表した天皇の御尊顔を、故に龍顔と言う。

そして、大嘗祭が「卯＝兎の日」に斎行されるのは、新帝の不死＝“天皇の永遠、天皇の弥栄”を願うからに他ならない。

(3)衮冕十二章（こんべんじゅうにしょう）

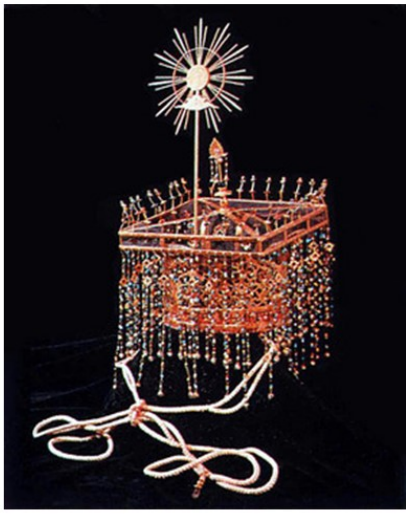
現代の即位式に於ける天皇の礼服（らいふく）は黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）だが、平安時代から孝明天皇の代に至るまでは、唐の皇帝の同じ礼服である衮冕十二章だった。衮衣（こんえん）という赤い礼服と冕冠（べんかん）という帝王の特別な冠である。十二章は帝王の権威を表す 12 の紋様のことで、烏、龍、麒麟、キジ、猿、虎などで、詳しくは次の図をご覧頂きたいが、注目すべきは背中側の首もとにある紋様である。それは、北斗七星である。

道教からすれば、北斗七星は天帝の御者とされるが、諏訪の北斗神社では天御中主神を祀る。天帝とは天上の最高神を意味し、創造主であって、すなわち天御中主神である。天皇大帝（てんこうたいてい）とも言い、「天皇」の語源でもある。天皇大帝が神格化された星が天に於ける不動の星＝北辰＝北極星である。

すなわち、衮冕十二章に描かれている北斗七星は、天御中主神を祀る祭主が

天皇であり、天皇は天御中主神の地上に於ける代理人であることを暗示している。
　ここで、元伊勢・籠神社の極秘伝“豊受大神　亦名　天御中主神　亦名　天照大神”からすれば、先の日輪と月輪も、実は天御中主神であることを暗示しているわけである。

袞冕十二章袞



https://gshss-dean-chiba.blog.so-net.ne.jp/2019-04-11

(4)新嘗の夜
　大嘗祭は天皇一世一代の新嘗祭である。大嘗祭は、大化以前から斎行されてきた毎年の収穫祭である新嘗祭を基に、国郡制を基幹とする律令国家体制に即応する国家祭祀として、天武天皇の御代に創出された。8 世紀の『続日本紀（しょくにほんぎ)』では、大嘗祭が「大新嘗祭」と記載されていることからも、それは裏付けられる。

　かつて、即位式は正月に行われ、新嘗祭は冬至頃に斎行されていた。また、常陸国風土記等に依れば、新嘗の夜には、神々が降臨して巡幸すると考えられていた。更に、正月と言えば歳神＝大歳神をお迎えする行事で、その依り代的存在が後に門松となった。つまり、即位の儀礼と新嘗祭は、ほぼ同時期に天皇御親ら新穀でもって神々をお迎えする儀礼と言える。
　そして、崇神天皇の御代までは同床共殿（どうしょうきょうでん）の祭祀（＊）

だったことからすると、古い時代は即位と新嘗の祭礼が同時に行われていたと考えられる。ならば、即位式でも大嘗祭でも、共通の神祭りが行われていることは当然であり、これまでの考察内容は矛盾しない。

＊天照大神の分身とされる八咫鏡を宮中で祀っていた祭祀。崇神天皇の御代に国内で疫病が流行り、古事記に依れば、その原因は大物主神の祟りのためとされたので、天皇ではなく、その子孫が大物主神を祀るようになった。日本書紀に依れば、同床共殿で天神の天照大神と共に地祇の倭大国魂神も祀られていたが、天皇は二柱の神の神威の強さを畏れ、宮中の外で祀ることにした。天照大神は皇女の豊鍬入姫命（トヨスキイリヒメノミコト）に託して大和の笠縫邑（かさぬいむら）に祀り、倭大国魂神は渟名城入姫命（ヌナキイリヒメノミコト）に預けて祀らせたが、後に市磯長尾市（イチシノナガオチ）が祀ることとなった。

(5)米と粟の再考

8：では“粟こそが大嘗祭の秘儀”としたが、ここまで考察を基に、天照大神と豊受大神の観点で米と粟を再考する。

粟は米に先立つ穀物で、縄文時代から食されていた。だから、粟（と麻＝麁服）は儀式が先立って斎行される悠紀に、米（と絹＝繒服）は主基に相当する。また、粟＝アワ＝阿波の忌部氏である三木氏は麁服に神降ろしするが、その神は前述の如くウシトラノコンジン＝豊受大神である。ならば、粟は豊受大神、米は天照大神に相当すると言える。そして繰り返しになるが、悠紀殿での儀が主基殿に先立って斎行されることは、豊受大神を祀る外宮の儀が天照大神を祀る内宮に先立って行われる外宮先祭と同義である。従って、粟＝悠紀殿＝外宮＝豊受大神、米＝主基殿＝内宮＝天照大神という図式が成立し得る。

更に、作物的な観点からすると、粟は米が育たないような寒冷地や高地、高緯度地域でも栽培可能である。これを陰陽に当てはめれば、米は陽、粟は陰の穀物と言える。

そして、太陽をシンボルとする天照大神は陰陽道的には陽、月をシンボルとする豊受大神は陰となり、両者陰陽の合一で天御中主神を形成するわけである。故に、米＝陽＝天照大神、粟＝陰＝豊受大神と言える。つまり、粟と米の両方を聞し食されることにより、陰陽の合一によって天御中主神の霊威を頂くことになる。

なお、降臨する神として、一般的には前述の天照大神以外ではタカミムスビノカミが挙げられることがある。天御中主神、カミムスビノカミと共に造化三神を形成するが、タカミムスビノカミの娘（ヨロズハタトヨアキツシヒメ）は天孫ニニギの母であり、タカミムスビノカミは天照大神よりも優位に立って天孫降臨を司令した。また、即位前の神武が熊野から大和に侵攻する場面で神武を助けたタカクラジの夢に登場して手助けしたりしており、常に天照大神（とその子孫）を裏から支えるような役割で、実質、高天原はタカミムスビノカミ

と天照大神によって統治されていたとも言える存在である。そうすると、タカミムスビノカミは創造神的な造化三神の一柱で、高天原を神々の世界としての創造神の世界と見るならば、タカミムスビノカミは豊受大神に相当する。

では今一度、悠紀殿と主基殿の両殿で同じ儀式が斎行されることについて考察する。

悠紀殿、主基殿では共に粟と米が供えられ、両殿は同じ儀式が斎行されるが、悠紀殿の儀式は午後 9 時から 11 時頃に、主基殿の儀式は午前 3 時から 5 時頃に斎行されるという点のみが異なる。

大嘗祭では神が神座に降臨し、天皇御親ら神饌を奉っておもてなしされるが、悠紀殿、主基殿いずれも天皇がおもてなしする神は天照大神とされてきた。ならば、悠紀殿で天皇が神をおもてなしした後、神は寝座で床に就かれ、そして高天原へお戻りになるはず、である。しかし、その後は主基殿にも降臨し、同じことが繰り返されるということはおかしい。

そこで、外宮に相当する悠紀殿の儀式は深夜だから陰、内宮に相当する主基殿の儀式は夜明け近いから陽ということ、及び外宮先祭ということからすると、まず悠紀殿に降臨されるのは豊受大神で、豊受大神は豊穣神で食も司るから、新穀の米と粟、特に陰の象徴である粟を通じて天皇は深夜に陰である豊受大神の霊威を頂く。その後、暁の頃になると主基殿に天照大神が降臨し、天皇は特に陽の象徴である米を通じて陽である天照大神の霊威を頂く。これにより、豊受大神の霊威と天照大神の霊威の陰陽の合一が完成し、天御中主神の霊威を頂いたことになる。そして、すべての儀式が終わる頃、朝日が昇り、日嗣の皇子としての天皇が完成するわけである。

つまり、大嘗祭で粟が秘儀とされるのは、陰（いん）の新穀である粟の陰（かげ）に陰（いん）である豊受大神が隠されていたからに他ならない。そして、御座と神座が神宮の方角に向けられ、時間差をつけて悠紀殿と主基殿の両殿で同じ儀式を斎行するのは、皇祖神たる天照大神のみならず、豊受大神も天皇御親らおもてなしして霊威を頂くからである。

また、悠紀殿と主基殿の両殿に新穀としての粟と米、神服としての麁服と繪服をそれぞれお供えするのは、単にそれぞれが豊受大神、天照大神を暗示しているだけではなく、粟と米、麁服と繪服のそれぞれの両者が合わさって天御中主神を暗示しているからである。

すなわち、大嘗祭は天皇が御親ら神祭りし、新穀を通じて豊受大神と天照大神の霊威を頂き、両者陰陽の合一で天御中主神の霊威を頂くことになって“天皇の永遠、天皇の弥栄”を願う儀式に他ならない。

以上、即位式は、新帝が天御中主神を祀る祭主かつ地上に於ける代理人であることを内外に知らしめる儀式であり、大嘗祭は、新穀を通じて天御中主神の霊威を頂き、“天皇の永遠、天皇の弥栄”を願う儀式である。

かつて、神社は東西方向（本殿は東向き）を向いていた。それがいつからか、主に南北方向（本殿は南向き）に変えられた。そうすると、参拝者は北を向く

こととなるが、それは北極星＝天御中主神を拝しているに他ならない。

また、粟に関わる阿波は、国内で唯一、オオゲツヒメを祀る。古事記に依れば、オオゲツヒメはスサノオに斬り殺され、体の各部位から蚕や穀物が芽生えたとされ、アワ（阿波、粟）の国の名前として記載されている。つまり、オオゲツヒメは豊穣の女神であり、豊受大神と同義で、そのオオゲツヒメが祀られるのは上一宮大粟神社（徳島県名西郡神山町）、一宮神社（徳島県徳島市）、阿波井神社（徳島県鳴門市）で、いずれも徳島＝アワの国のみである。これが、日本書紀ではツキヨミがオオゲツヒメと同義のウケモチノカミを殺したことになっている。ウケモチノカミ＝保食神だから、オオゲツヒメ＝ウケモチノカミ＝豊穣の女神＝豊受大神である。中でも、上一宮大粟神社はかつて阿波一之宮という格式であり、伝承に依れば、衣食の神の総本宮であり、イザナギ、イザナミ両神よりも古い神で月神であり、永遠不滅ということからしても、やはり豊受大神と同義である。
（この神社伝承部分は以下参照。
https://www.youtube.com/watch?v=kES5FciT_cM&feature=youtu.be
https://www.youtube.com/watch?v=fH38SKHBSDo&feature=youtu.be）

むしろ、歴史の流れを考えると、海部氏一団が沖縄・奄美を経て霧島～宇佐に渡来して縄文王家の入り婿となり、その後、四国の太平洋岸及び瀬戸内に分かれて近畿に向かい、途中、忌部氏の一部が阿波に留まり、祭祀の基礎を整えつつ、海部氏が丹後へ達して中央の縄文王家に入り婿し正式な弥生大王家となり、南下して邪馬台国を築くと、阿波忌部氏が呼び寄せられて新たな祭祀が始まり、それを暗示させるために、阿波と紀伊半島の地名を同じとしたことからすれば、豊受大神祭祀の根源も阿波と言えるだろう。それを裏付けるかの如く、上一宮大粟神社の拝殿近くにも、元伊勢・籠神社の奥宮、眞名井神社の名の由来となった「天の眞名井」がある。

なお、同じく徳島にある天石門別八倉比売（あまのいわとわけやくらひめ）神社もかつての阿波国一宮とされ、「天の眞名井」もあるが、そちらは大日孁（おおひるめ＝天照大神）の葬儀の模様を社伝で継承しているので、天照大神系である。しかし、籠神社の極秘伝“天照大神の荒御魂は豊受大神の和御魂　豊受大神の荒御魂は天照大神の和魂”や天御中主神の陰の側面が豊受大神、陽の側面が天照大神であることからすれば、上一宮大粟神社のオオゲツヒメ＝豊受大神と天石門別八倉比売神社の天照大神の両社で陰陽の合一と見なすことができ、何も矛盾することではない。そして、もう 1 つの阿波一之宮とされる一宮神社では両社の祭神であるオオゲツヒメと天石門別八倉比売命を祀る。現在、「公式な」阿波一之宮とされる大麻比古神社は祭神が大麻比古神＝天太玉命で、古い一之宮とは祭神が異なるが、天太玉命は忌部氏の祖神であり、この天太玉命と共にオオゲツヒメを祀るのが、阿波井神社である。

このようなことからすれば、阿波＝アワとは、あ＝a＝α、わ＝w＝ωだから、

“わたしはアルファでありオメガである”主（しゅ）であり、平仮名の最初と最後（の行）、阿吽、アーメンでもある。つまり、阿波は現在に繋がるヤマトの祭祀の始まりであり、その後、四国は封印されて“死国”の如くなったが、“終わりの時”には封印が開封され、阿波忌部氏の祭祀で締められる。後土御門天皇を最後とし（1466 年）、約 200 年途絶えていた大嘗祭が東山天皇（1687 年）の御世に復興され、1338 年の光明天皇を最後に途絶えていた阿波忌部氏に依る麁服の調進も大正天皇の御世（1915 年）に 577 年振りに復興したことからすると、令和の大嘗祭がその締められる祭祀なのかもしれない。（阿波忌部氏に依る麁服の調進が成されなかった時代は、「忌部所作代」と称して神祇官が調製していた。）

11：文献

大嘗祭の基礎資料は『貞観儀式』と『延喜式』である。それぞれに践祚大嘗祭の特記がある。私撰の儀式書としては『西宮記』『北山抄』『江家次第』があり、卜部家代々の家伝を集めた『宮主秘事口伝抄』などもある。

大嘗祭の解説書とでも言うべきものに、一条兼良の『御代始和抄』、荷田在麿（カダノアリマロ）の『大嘗会儀式具釈』と『大嘗会弁蒙』があり、『大嘗会儀式具釈』は桜町天皇の大嘗会の次第に註釈を加えたもので、その抄が『大嘗会弁蒙』である。

大正・昭和・平成の大嘗祭を知るには、『大正大礼記録』『昭和大礼要録』『平成大禮要話』がある。

12：大嘗祭までの流れ

以上、『神社のいろは　要語集　祭祀編』（扶桑社）からの紹介と考察だが、最後に、時代によって流れが異なっている部分もあるが、上皇陛下（平成天皇）の大嘗祭までの流れを説明する。（主に Wikipedia より。）上皇陛下とそれ以前の天皇とで最も異なる点は、即位礼も大嘗祭も京都ではなく、東京で行われたことである。

・昭和 64 年 1 月 7 日：昭和天皇崩御・新帝即位

天皇崩御後、直ちに皇嗣（基本的に皇太子）が即位。即位とは、基本的には皇位に就いたことを天下に布告することなので、正式な即位は即位礼後となる。しかし、現在では先帝崩御後に皇位を争うことは無いので、皇太子が皇位を継承したことを明示すること。

・同日：内閣総理大臣謹話・剣璽等承継の儀・新元号制定

剣（草薙神剣の写し）、璽（八尺瓊勾玉）、国璽（国家の印章）、御璽（天皇の印章）を侍従長が新天皇の前にある机に置く短い儀式が、皇位継承後間もなく、10 時頃より宮殿正殿松の間で行われ、践祚（剣璽等を継承すること）の旨が告げられた。

・同日：皇霊殿神殿に奉告の儀

皇室の先祖代々の皇霊を奉る皇霊殿及び天神地祇を奉る神殿に於いて、新天皇の践祚を奉告する儀式。剣璽等承継の儀が執り行われているほぼ同時刻に、宮中三殿に於いて、掌典長が新天皇の践祚を奉告した。

・同 1 月 9 日：賢所の儀
賢所に御神体として奉られている八咫鏡の継承儀式。

・同日：即位後朝見の儀
践祚後の新天皇が初めて首相らに言葉を述べる国事行為。

・平成元年 2 月 24 日：大喪の礼・斂葬の儀（葬場殿の儀・陵所の儀）
大喪の礼は新宿御苑にて国事行為。斂葬の儀は皇室の行事。

・平成 2 年 1 月 23 日：賢所・皇霊殿・神殿に期日奉告の儀
神宮・天皇陵等に勅使発遣の儀
・同 1 月 25 日：神宮・神武天皇・前四代天皇陵奉幣の儀
・同 2 月 8 日：斎田点定の儀
・同 8 月 2 日：大嘗宮地鎮祭
・同 9 月 27 日：斎田抜穂前一日大祓（悠紀田：秋田県五城目町）
・同 9 月 28 日：斎田抜穂の儀（悠紀田）
・同 10 月 9 日：斎田抜穂前一日大祓（主基田：大分県玖珠町）
・同 10 月 10 日：斎田抜穂の儀（主基田）
・同 11 月 12 日：即位礼当日賢所大前の儀
即位礼当日皇霊殿・神殿に報告の儀
即位礼正殿の儀（国事行為）
祝賀御列の儀（オープンカーでのパレード、国事行為）
・同 12 日～15 日：饗宴の儀（国事行為）
・同 11 月 13 日：園遊会・内閣総理大臣夫妻主催の晩餐
・同 11 月 16 日：神宮に勅使発遣の儀
・同 11 月 18 日：一般参賀
・同 11 月 20 日：大嘗祭前二日御禊・大祓
・同 11 月 21 日：大嘗祭前一日鎮魂の儀・同大嘗宮鎮祭
・同 11 月 22 日：大嘗祭当日神宮に奉幣の儀
大嘗祭当日賢所大御饌供進の儀
大嘗祭当日皇霊殿・神殿に奉告の儀
大嘗宮の儀・悠紀殿供饌の儀
・同 11 月 23 日：大嘗宮の儀・主基殿供饌の儀
・同 11 月 23 日～25 日：大饗の儀
・同 11 月 24 日：大嘗祭後一日大嘗宮鎮祭
・同 11 月 27 日～28 日：即位礼・大嘗祭後神宮に親謁の儀
・同 12 月 2、3、5 日：即位礼・大嘗祭後神武天皇・前四代天皇陵親謁の儀
・同 12 月 3 日：茶会
・同 12 月 6 日：即位礼・大嘗祭後賢所・皇霊殿・神殿に親謁の儀
即位礼・大嘗祭後賢所御神楽の儀

・同 12 月 10 日：天皇陛下御即位記念祝賀会

・平成 6 年 11 月 20 日：御袍更衣の儀
　即位礼の際に天皇がお召しになったのと同じ黄櫨染御袍を、広隆寺の聖徳太子像に着せる儀式。

聖徳太子像

https://www.pinterest.jp/explore/広隆寺/?lp=true